

# 東京五輪を前に国は感染症「風疹」の封じ込めに懸命

医療ジャーナリスト

大谷克弥

## ◆働き盛り「39歳から56歳の男性」は抗体検査を是非

来年7月に迫った東京オリンピックでは、亜熱帯並みと言われる炎天下での開催に、アスリートたちは勿論、海外からの観客にも熱中症の多発を心配する声が上がっていますが、もう1つ強く懸念されている病気があります。それは昨年から首都圏を中心に、患者が急増している感染症の風疹です。

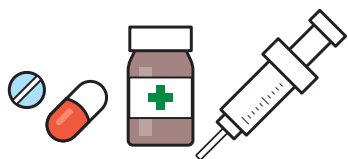
感染症とは細菌やウイルスなどの病原体が体内に侵入して発症する病気のことですが、風疹は咳やくしゃみなどの飛沫感染によって広がります。以前は「3日ハシカ」と呼ばれ、小児のうちに感染して、軽い発熱や発疹などの症状が出ても3日もすれば治り、ごく自然に免疫を持つのが通常でした。

ところが効果的な予防ワクチンが開発され、現在はハシカと一緒に混合で、1歳と小学校入学前の2回接種が行われています。ただ、この公的なワクチン接種は、1回だったり2回だったり、また受けなくても良い時期があったりしたものですから、関係者も驚く事態が起きてしまいました。

その1つは昨年、首都圏で風疹が多発した際、患者の約8割が中年男性だったことです。そして調べているうちに1962年4月2日から79年4月2日までに生まれた男性は接種を受ける機会がなく、女性は中学生になって集団接種を1回受けていることが分かってきました。そこで厚労省は大慌てで政令を改正し、今年2月から該当男性は原則無料で風疹の抗体検査と、それに次ぐ予防接種を受けられることになりました。

風疹の年間発生件数は、かなり波があっても3桁台にとどまっていたのですが、12年は2,386人と4桁台に、さらに翌13年は14,344人と5桁台を記録しました。その後は、一昨年が93人と2桁だったのに、昨年は2,917人と再び4桁台になり、今年も更なる流行が憂慮されています。

感染症では兄貴分のハシカも今年に入って多発し、全国的な感染の拡大が心配されています。感染力はインフルエンザの10倍もあるのですが、国際的には弟分の風疹の方がより強く警戒されています。その理由を次に述べていきます。



### 筆者紹介

大谷克弥（おおたに・かつや）

医療ジャーナリスト。東北福祉大学講師。日本医学ジャーナリスト協会会員。読売新聞社出身で、在職中に長期連載「医療ルネサンス」を創設。現在はフリーで、著作、講演活動などに従事。

## ◆お腹の赤ちゃんも感染する怖い病気であることの認識を

一部の国から既に「風疹の日本に渡航するのは自粛を」と国民に勧告が出ているのには、理由があります。それは妊娠初期の女性が感染すると、深刻な障害児の生まれる可能性があるからです。これは先天性風疹症候群（CRS）と呼ばれ、妊婦のお腹にいる赤ちゃんにもウイルスが及び、死亡することもあれば、3大症状と言って心臓病、難聴、白内障を罹患して出生することが少なくありません。3大症状は1つだけでなく複数のこともあり、そのほか血小板減少、糖尿病、網膜症、小眼球から発育遅滞、精神発達遅滞などの病状を伴うこともあります。

妊婦は予防接種を2回受けていれば感染の心配はまずないのですが、受けていない人は元より、受けても1回だった人はリスクを持っています。CRSの出生は妊娠20週までの感染が多くて、初期であるほど頻度は高く、妊娠1か月は50%以上、2か月は35%というデータもあります。そして重要なのは、妊娠が確認されれば予防接種は禁止されていることです。

海外からの警戒の目は、今年1月下旬、埼玉県でCRSの男児出生のニュースが報じられて、より強くなりました。先述した12年から13年の大流行の際は、CRSの赤ちゃんが45人生まれ、うち11人が亡くなりました。その後はゼロ続きでしたが、今回は5年ぶりの出生です。どうしても、今年は患者がさらに増え、CRSも続発するのではと、昨年から続いている風疹多発との関連性が強く疑われてしまうようです。

事態がここまで進んでくれば、国にはより強固な予防策の実施を望むとして、国民の側にも社会的防衛の観点から協力の足並みをそろえる必要があります。はからずも「空白の世代」と呼ばれるようになった働き盛りの男性該当者は、必ず抗体検査を、そして必要と判定されればワクチン接種を受けるべきです。年配になっての感染は重症化する怖れがあるので、まずは自分のため、そして世の妊婦さんを巻き込まないためです。

同時に、こうした検査にはかなりの時間を取られるので、企業側にも理解が求められます。もし職場健診に並行して抗体検査を実施できるならスムーズにはかどるので、その決断が今後の課題と言えます。最後に妊婦さんには、予防接種を受けていても人混みに出るのはなるべく避け、無事に元気な赤ちゃんを出産して五輪を迎えられるよう、願っております。